第 177 回「言葉の院外処方箋」

新渡戸稲造記念センター 長 樋野興夫

架け橋を築く ～ 光が差し込む ～

2023 年 5 月 29 日 恵泉女学園の理事会に出席した。 筆者は 2003 年、『われ 21 世紀の新渡戸にならん』(イーグレープ)を出版した。 筆者が理事長をつとめる恵泉女学園の創始者 河井道(1877 – 1953)は、新渡戸稲造(1862 - 1933)の弟子のひとりで、『わたしのランターン』という著書の中で、『前向きで、前進的であること』を信条として掲げている。 筆者も、それに倣って、『前向きで前進的でありたい』と願っている。 そして、新渡戸稲造が『東洋と西洋をつなぐ架け橋』になることを願ったように、『医療とがん患者をつなぐ架け橋を築く』ことが、筆者の使命だと、今回、さらに思いを新たにした。

5 月 30 日午前中は、【柏がん哲学外来】(千葉県の柏地域医療連携センターに於いて)に赴いた。 【柏がん哲学外来】は、2009 年 当時の国立がんセンター東病院の病院長の江角浩安先生の お計らいで、柏の葉キャンパス駅隣接の国立がんセンター東病院の施設ビルで始められた。 2016 年から柏地域医療連携センターに移動した。 今回、3 組の個人面談の機会が与えれた。神奈川県在住の方も面談に来られた。 大変有意義な貴重な時であった。

新渡戸稲造の著書『武士道』は有名である。 【日本古来の日本人の気高い精神を丹念にひもとき、世界の人々に日本精神の素晴らしさを知らしめた名著であることは疑う余地もない】。 【がん哲学外来】での面談者に出す『言葉の処方箋』は、新渡戸稲造と内村鑑三(1861 - 1930)から学んだ『人生哲学のエッセンス』であり、筆者の生きる基軸にもなっている。【新渡戸稲造 & 内村鑑三の言葉は『暇=日間=光が差し込む』】である。 まさに『がん哲学外来』の原点ではなかろうか!

その後、スタッフと昼食の時をもった。『スルメ症候群数え唄』を作詞・作曲された中野綾子氏も参加され、次作として『【樋野動物園】のテーマソング』を作詞・作曲される予定で、大いに話が盛り上がった。

その後、順天堂大学保健医療学部 理学療法学科の２年生の『病理学概論』(14 : 50～16 : 20)の講義に赴いた。 講義『病理学概論』では、教科書『カラーで学べる病理学』を用いて、第 5 章『炎症』を音読しながら進めた。